

☆ 酒井格「四季」シリーズ、ついにコンプリート!?

—— 今回のまちかね山吹奏楽団の演奏会では「雛祭り幻想」を演奏しますが、季節をタイトルにした曲を多く書かれていますね？

酒井.. 4曲だと思います(笑)。「雛祭り幻想」「たなばた」「七五三」をおみそか。

春夏秋冬、ですね。

小野川.. さしずめ、四季コンプリート。—— お伺いしますが、酒井先生は先にタイトルを決めて曲を書かれますか？曲を書いてから、後でタイトルを付けますか？



酒井.. 曲によります。何にしようかな、と思いながら書いていることもあるし、最初から「これや!!」とか言つて曲を書き始めることもあるし。後から変えることもありますよ。なんと、初演の後に題名を変えた事もあります。

まあ、この世界は色々あります(笑)。—— ありがとうございます。では酒井先生が作曲りで大事にしていることは何でしょうか？

酒井.. ちゃんと吹奏楽の響きの魅力を活かすということですかね。

吹奏楽でも吹奏楽以外でもその楽器の魅力を生かす、ということ。吹奏楽は

いろんな楽器があつていろんな響きが出る、それが何よりの醍醐味だと思います。



☆ 高校2年生のある日、急に「作曲しよう」と思い立ちました(笑)

—— 川合先生のご経歴をお伺いします、音楽を始められたきっかけを教えてくださいますか？

川合.. 家に電子ピアノのおもちゃみたいなのがあつて、それを叩いて遊んでたのが始まりです。その後中学2年生のときに友達に誘われて吹奏楽部に入部して打楽器を始めました。

小野川.. 中2で？途中入部なの？

川合.. そうです、途中から入ったんです。その頃から作曲は始めていました。クラブ入った時には曲を書いていましたね。

小野川.. クラブ入った時には書いてた!?

川合.. 一番最初にピアノをたたいて遊んでいた時代にも少し。

中学から高校になつてもずっと書いていました。そのときは作曲家になるとは思つていなくて、打楽器楽しいなあ、ぐ

らいだつたんです。

ですが、高校2年生のある日に「作曲しよう」って。急に天からの、天命が(笑)。

小野川.. 独学なの？

川合.. そうですね、なんか音鳴る、楽しい、が始まりですから、ドレミを習つたわけでもなく間違つた自分の記譜法で書いてましたね(笑)。

リズムも音程も、なにかも間違つていたんですよ。当時は自分にしか読めない記譜法で書いてましたね。

—— 酒井先生、川合先生お二人の話に共通しているのは、家に楽器があつて、やっているうちに、楽しくなつた

という原体験でしょうか。

酒井.. そう。楽譜書くの楽しいよね。

川合.. 楽しいですね。手書きの楽しさ。酒井.. 地図を書いたり、家の間取りを書いたりとかも楽しいんだよ。

川合.. 地図と楽譜って、すごく似てますよね？

酒井.. 架空の町の地図とか結構描いていましたね。

川合.. 私の場合は美術、特に絵画が好き。それから小学校の卒業文集に、「何かをつくる人になりたい」って書いています。それが小学校のときの夢だったんです。そのときは、何かをつくるっていうのは、美術とか、物体だと思つていたんですね。いつの間にか「音」になつてたっていう感じですね。

—— 音楽の楽譜と地図や美術には、どこが共通点があるのでしょうか？

酒井.. 美しい地形はやっぱ美しいし、地形と地形図はリンクしています。

音楽では、音と楽譜はリンクしている。だからつながりはあると思うよね。

池辺晋一郎氏も地図を書くのが好きみたいで、架空の地図を何十枚と書いていますよ。

—— 川合先生は大阪の市岡高校をご卒業後、大阪音楽大学に進学され、本格的に作曲を勉強されることになりました。

川合.. 先ほど言いましたが、高校2年生のときに、急に「あ、作曲したい」と思い立ちました。そこで(作曲家の)高昌帥先生が出演なさっている演奏会の終演後に高先生の楽屋に突撃して、「あの、作曲教えて下さい!」って飛び込んだ(笑) そこからずつとの関係です。4月1日なんです。エイプリルフルに、門下生になりました。

—— その後、研鑽を重ねられた。

川合.. そうです。今回演奏して頂く「シンフォニックバンドのためのオクシモロン」は大学を卒業して2年目の作品です。「オクシモロン」とは撞着語法(どうちやくごほう)という言語学の言葉です。反対の意味の言葉をくっつけて別の意味の言葉になる、例えば「小さな巨人」や「明るい闇」などが分かりやすいと

